

予言のテキストとサブテキスト

『マクベス』におけるインターテクスチュアリティ

小林 潤司

1. 「女から生まれた者は」

『マクベス』第4幕第1場で、魔女たちが呼び出した幻影が主人公に告げる「女から生まれた者は誰もマクベスに危害を加えぬ (none of woman born / Shall harm Macbeth)」(79-80) という「予言」は、この直後に出てくる「大いなるバーナムの森が、高く聳えるダンシネーンの丘に向かって攻め寄せられるまでは、マクベスは打ち負かされない (Macbeth shall never vanquished be, until / Great Birnam Wood to high Dunsinane Hill / Shall come against him)」(91-93) と同様、普通に考えれば、「たとえお天道様が西から昇ろうと」のような慣用句がそうであるように、絶対にありえないことを引き合いに出して、「決して (マクベスは打ち負かされ) ない」と断定し、マクベスの天下無双を保証する陳述として解釈できる。現にマクベス自身もごく自然にそう理解するわけだが、言うまでもなく、これらの「予言」の「意味」は最後には覆る。

バーナムの森が動き出したのは、木の枝でカムフラージュした兵士たちの進軍が遠目に森が動き出したように見えたということで、わからなくもないのだが、問題はもうひとつの方である。戦場でマクダフと相見えたマクベスは「女から生まれた者は」の予言を盾に、自分は無敵だと嘯くが、相手はすかさず「そんな呪いは諦めろ (Despair thy charm)」(5.8.13) と一喝し、自分は「切り裂かれた母の子宮から時ならずして引き出されたのだ (Macduff was from his mother's womb / Untimely ripped)」(15-16) と明かすと、マクベスはすぐに「俺の男としてのより良い部分 (= 勇気) は怖気づいてしまった (it hath cowed my better part of man)」(18) と言って、「予言」による「天下無双の保証」が無効であることをあっさり認めてしまうのである。

2. 「予言」の謎解き

「帝王切開によって生まれた者は女から生まれたことにはならない」という、この一見不可解な論法について従来は、この悲劇の主たる材源であるホリンシェッド (Raphael Holinshed) の『年代記』(*The Chronicles of England, Scotland, and Ireland*) 中のマクダフの言葉「(おれは) 母から生まれたのではなく、その子宮から切り裂き引き出されたのだ (never borne of my mother, but ripped out of her wombe)」(Muir 179) を踏まえ、“born”ではなく“ripped”という対照で説明されることが多かったが、加藤は、材源テキストの記述を一種の枠にして解釈の幅を限定してしまうのではなく、同時代の観客/読者が想起した別のコンテキストやサブテキストが「意味」の生成に干渉した可能性に目を向けている。

加藤は、中世から初期近代にかけてのヨーロッパの医学文献から当時の医学事情「[当時] 帝王切開という大手術は母親の生命を救う目的も希望も持ちようがなかった。——女は、確実に死んだのだ」(145) を明らかにした上で、帝王切開で生まれたマクダフの母親は出産時には死んでおり、マクダフは性別のない死体から生まれた以上、「女」から生まれたことにならないというロジックを読み出す。さらには、この「死体から生まれた」ということは、女から生まれたことにならない」という理路の背後にはサブテキストとして、『マクベス』の先行作品である『ハムレット』の墓掘りの場の一節 (5.1.128-34) が作用した可能性があると指摘する。

『マクベス』の「女から生まれた者は」の「予言」の「謎」を、『ハムレット』の墓掘りの場というサブテキストを参照して解き明かす加藤の読みは十分に説得的だが、この解釈を受け入れた上で、さらに考えてみたい問題がある。それは、この「予言」にかかわるもうひとつのサブテキストをめぐる問題である。

3. 救世主降臨への期待

改めて指摘するまでもないほど自明のことだが、幻影が告げる「女から生まれた者には」の予言を聞いた初演の観客が、その場で反射的に想起するサブテキストがあるとすれば、それは『ハムレット』ではなく、「マタイによる福音書」の第11章だろう。

Ueryly I say vnto you, among them that are borne of women, arose not a greater then Iohn the Baptist: Notwithstandyng, he that is lesse in the kingdome of heauen, is greater then he. (Matthew 11:11)

この「およそ女から生まれた者のうち、洗礼者ヨハネより偉大な者は現れなかった」という一節は、ヨハネが

地上でもっとも偉大な者であると宣言しており、その意味では「女から生まれた者たち」は「全人類」とイコールと考えられる。しかしこの一節が、イエスの口から発されたことばであることを頭に置いて読めば、どうしても、別の含みを読み取らないではいられない。つまり、イエス自身が天(天の王国)から地上に遣わされたこと、「女」(性的な経験を有する成熟した女性、妻)からではなく「処女」マリアから生まれたことを踏まえ、自分はその例外であり、ヨハネを凌ぐ存在であると宣言しているという読みかたである。

イエスは、旧約聖書の中でたびたび降臨が予言されていた救世主(邪悪なる迫害者たちを撃ち滅ぼし、善良なる人々を解放するメシア)としてではなく、(例外なく罪人である)全人類を赦し救済するべく、身代わりとなって十字架上で処刑されるキリストとしてこの世に現れた。「わたしにつまずかない者は幸いである(happy is he that is not offended in me)」(Matthew 11:6)は、旧約で予示されていたメシアのイメージに収まりきれない新たな救世主としてこの世に遣わされた自分を見て「つまずく」(本質を見誤って不信に陥る)ことがない者は幸福であると言っているわけだ。イエスの生涯は「救世主降臨の予言を、誰もが予想できなかった意表をつくり方でも実現する画期的な救世主の出現」というパターンの説話になっている。この旧新約聖書を通して語られた「大きな物語」もまた、『マクベス』の「女から生まれた者は」の「予言」のトリックを解釈する上でサブテキストとして作用することが期待されているのであろう。

4. 期待は裏切られたのか？

ここまで見てきたことから、「女から生まれた者は」の予言の意味作用には、実は、一筋縄ではいかない、思惑違いと期待充足の複雑な交錯があることに気づかされる。

最初に「マタイによる福音書」をサブテキストとして立ち上がってくる「予言」の解釈は、「マクベスを打ち負かせるのは、イエス・キリストのような天の王国から遣わされた救世主だけである。今時、そんな救世主が降臨するなんて考えられない。ゆえにマクベスを打ち負かすものは決して現れない。マクベスは天下無双である」といったところだろうか。さらに、このありえそうもない救世主降臨への期待をめぐって、その後、一度だけ、英国王エドワード(懺悔王)の神秘的な治癒力への言及というかたちで、ちょっとしたナッジ(合図)が送られる(4.3)。「癒やしのお恵(the healing benediction)」(156)や「天与の予言能力(a heavenly gift of prophecy)」(157)への言及は、「奇しき力(strange virtue)」(156)を代々継承する正統な王の系譜に属さない、不当に王位を篡奪したマクベスの非正統性を際立たせるための仕掛けであると同時に、「マタイによる福音書」でイエスが言及していた自身が持つ神秘的な治癒力(11:4-5)を観客/読者に想起させるためのナッジとしても作用している。エドワード王という、霊的なパワーを持つ君主のイメージを持ち出し、救世主(あるいは救世主的なキャラクター)の出現への期待を掻き立てていると考えられる。

「切り裂かれた母の子宮から時ならずして引き出された」マクダフの登場によって、予言による「天下無双」の保証は無効を宣言される。「女からではなく処女から生まれたキリスト」ではなく、「女からではなく死体から生まれたマクダフ」が、マクベスと観客/読者の期待を裏切り、マクベスを打ち負かす。そこでサブテキストとして作用しているのが『ハムレット』の墓掘りの場であることは、加藤が指摘する通りであろう。

ここで考えてみたいのは、「マタイによる福音書」をサブテキストとして萌し、エドワード懺悔王のエピソードへの言及によって補強されていた「救世主降臨への期待」は、この展開によって裏切られたと単純に言い切れるものだろうかという問題である。

マクダフとマルカムという、劇のここまでの成り行きからは、観客/読者の全面的な共感を得ているとはいえないキャラクターたち(彼らほど、観客の嫌悪感を掻き立てる善玉キャラクターも珍しい)が劇の結末(5.8.20-41)で、新王の指名(マクダフ)とその受諾(マルカム)を行なうという展開が、曲がりなりにも受け容れられるとすれば、表向きは期待外れに終わった「救世主降臨への期待」が、観客/読者の意識下では、マクベスを打ち負かしたマクダフと、マクダフが王に指名するマルカムの背後に「救世主」のオーラを幻視させるというかたちで作用しているからではないだろうか。

引用文献

The Bishops' Bible : A Facsimile of the 1568 Edition. Elpis, 1998.

Muir, Kenneth, editor. *Macbeth*, by William Shakespeare. The Arden Shakespeare (Second Series). Methuen, 1984.

Shakespeare, William. *The Arden Shakespeare Third Series Complete Works*. Ed. Richard Proudfoot, et al. Bloomsbury, 2021.

加藤行夫「帝王切開と『女』の死——『マクベス』の謎解き」『シェイクスピア——世紀を超えて』日本シェイクスピア協会編、研究社、2002年、138-51頁。